

## 「聴く」と「聞く」

聴も聞も「きく」という意味ですが調べてみますと、はっきりと意味内容が異なります。聴は音声をきく事を表わし、聞は心をききとる事を現す文字といわれています。

医師が使う聴診器は聞診器とはいいません。患者の心臓の鼓動をききとる器具です。聴衆、公聴会等熟語を挙げて考えてみても、音声を現す文字である事がうなずけます。

聞くはこれに対し、「聞というは、疑心あるまじきこと」とご聖人が述べられていますように、「疑わない」事が基盤になります。疑わないという事は「信じること」「相手の心と一つになる」という立場で初めて開かれる世界でもあります。

ご聴聞という言葉を浄土真宗では特に大切にします。聴と聞が重なっているところに重みがあるのです。聴く（音声）ことを通して、聞く（心）ことと味わいたい言葉です。唯、聴くだけに留まらず、本物を聞きとる事との戒めの言葉と解したいのです。

私達の身の周りには、偽ものと同じ位、本物が存在しているわけですが、丁度見えなく、聴けない音波みたいなもので、チャンネル（周波数）を合わせなければ聞きとることはできません。

合わせる仕事は聴の分野、聴は動です。じっとしては聞こえてくるものも聞くことは出来ません。

聞は静です。静かに聞思したいものです。

機会を作り（聴）ご縁を大切にして、本当のものを、私の腹にしっかりと確かめたい（聞）ものです。